

# 現代大学生における言語の性差意識

## ——男女の歌詞書き替えの課題から——

菊地 悟

はじめに

一般的に、日本語では性差が大きく、会話文を並べただけでどれが男性のものでどれが女性のものか、判断することができると言われている。判断のポイントは、特に一人称・二人称の代名詞、また、文末の終助詞であり、「俺は待ってるぜ」「私は待ってるわ」「お前にできるかな」「あなたにできるかしら」といった文から、それぞれの発話者の性別を推測することは容易であろう。

しかし、たとえば女性特有の終助詞とされる「かしら」を、実際の日常会話の中で耳にすることはほとんどない。テレビドラマや小説・戯曲など創作の中では、男女を書き分けるのによってつけの素材として今でも重宝に使われているかもしれないが、たとえば学生や院生に聞いてみても「使ったことがない」「使う人を見たことがない」という答えが返ってくるような状態である。

こうした変化について、遠藤織江は、『日本語学研究事典』の「女性語」の項で、以下のように述べている。

現在「女性語」の特徴は、女性専用の終助詞・人称詞・感嘆詞の使用と、動詞の命令形不使用などにあるとされる。しかし、最近の調査では、従来女性専用とされた「かしら」「だわ」「のよ」のような文末用法を使用する女性が減っていること、男性専用とされた、文末の「だ」「だよ」「なあ」、動詞に直接接続する「よ」などを使用する女性が増えてきたこと、スポーツ場面などで命令形や「ぞ」を使う女性がみられることなど、女性専用用法とされた用法の減退と、男性専用とされた語や用法を取り入れている女性が増えていることなどが報告されている。

筆者は岩手大学教育学部の「日本語のヴァリエーション」という授業の1コマで、言語の性差の問題を取り上げてみた。具体的には昭和57(1982)年、男女のデュエット曲としてヒットした「三年目の浮気」(作詞・作曲：佐々木勉、歌：ヒロシ&キーボー)の歌詞を提示し、男女のパートを交換して書き換えるという課題に取り組ませてみた。筆者の記憶には、かつて「ザ・ベストテン」という番組で1回限りの企画として同様の試みを行ったことが、今なお鮮明に残っている。はや四半世紀も前のことではあるが、そのときの歌詞もほぼ覚えているつもりである。男女の人称代名詞と終助詞を機械的に入れ替えていたほか、元歌のリフレインの部分で男性の言葉が命令調の「大目にみろよ」から懇願調の「大目にみてよ」に変化するくだりが、替え歌の女性の言葉では「大目にみてよ」から「大目にみてね」への変化に置き換えられていたのが印象的であった。なるほど、女性には命令表現が許容されていないのか、と思ったものである。

今回の課題でも、ほぼ同様な書き替えが見られるのではないかと想定していたのであるが、

学生から提出された課題に目を通したところ、現代の大学生は必ずしも以前なら当然想定されたような変更を加えているわけではないことに気が付いた。そこには、前述のような、言語の性差の減退現象の一端が現れているのかもしれない。

そこで、本稿では学生の了解のもと、その提出物を資料として、現代大学生がどのように歌詞の変更を行ったかを紹介し、現代における言語の性差意識について考察を加えてみることにする。

## 1 素材とインフォーマント

「三年目の浮気」の歌詞は、男女の掛け合いで構成されている。結婚もしくは交際三年目で浮気の発覚した男性が、反省するどころかこれまでの関係に甘えたり、開き直るような態度を見せたりして、それを女性がなじる。最後は、男性が弱気になり「大目に見てね」と懇願する。女性は「両手をついてあやまったって許してあげない」と形式上は突っぱねて終わるが、本当に怒ったままであるのか、半ば許しかかっているのか、どちらとでも取れるところがある。私の記憶の中では、最後は「～たら許してあげる」という歌詞もあったような気もするが、確認することはできなかった。

男性が「馬鹿いってんじゃないよ」「よく言うよ」と言えば、女性は「馬鹿いってんじゃないわ」「よく言うわ」と言い返す、といった具合に、まさに日本語の性差を典型的に示す歌詞となっている。全歌詞を引用したいところではあるが、著作権法に抵触する可能性もあるので、部分的に必要最小限の引用をするにとどめる。

「日本語のヴァリエーション」の授業においては、インターネットに掲載されていた元歌の歌詞を男女のパート表示無しで提示して、まず1行ごとに男女いずれのパートか判断させ、次に男女のパートを交換した歌詞を書かせ、最後に作業を通じて日本語の性差について考察させることを課題とした。提出させたのは歌詞の交換以降の部分である。

課題提出者は、全員で15名であったが、うち中国人留学生2名の分は分析から除外することとする。残り13名中、女子が11名、男子が2名である。なお女子のうち1名は社会人入学の学生であり、20歳前後の学生との異同が注目される場所である。

## 2 結果と考察

ここからは、学生が具体的にどんな書き替えを行ったかを紹介し、性差に対する従来の見方と対照しつつ、考察を加えていくこととする。

具体的な書き替えを大別すると、次の4種類であった。

1. 人称代名詞
2. 終助詞
3. 命令・依頼表現
4. その他

以下、順を追って見ていくこととする。

### 2-1 人称代名詞

元歌では、男性は「俺」「お前」、女性は「私」「あなた」を使用している。

今回の書き替えでは、すべての学生が、男性から女性への書き替えでは「俺→私」、「お前→

あなた」、逆に女性から男性への書き替えでは「あなた→お前」「私→俺」で一致していた。

元歌の表現をそのまま踏襲した形である。25年前の番組での歌詞も同様だったと記憶する。浮気をして開き直る女性には少し蓮っ葉に「あたし」「あんた」を使わせたり、浮気をされる男性の側に「僕」「君」を使わせるというような方法もあり得ようが、一般的な男女の書き分けとしては、「私」「あなた」「俺」「お前」で十分なのであろう。

## 2-2 終助詞

人称代名詞とは違い、ほぼ全員が同じ書き替えをしたものもあれば、個人差の大きいものもあった。まず男性から女性への書き替えについて述べ、続けて女性から男性への書き替えについて述べることにする。

### A 男性→女性

書き替えが見られたのは、「よ」と「ぜ」で終わる部分であった。

#### ① 「よ」の書き替え

書き替えが見られた部分での「よ」の上接語によって、さらに6つに分けることができる。

- a. 活用語の終止形に直接接続：「馬鹿いってんじゃないよ」「よくいうよ」「馬鹿やってんじゃないよ」
- b. 名詞に「だ」を介して接続：「お前の負けだよ」
- c. 疑問の終助詞「か」に接続：「旅だてるのかよ」
- d. 活用語の命令形に接続：「大目にみるよ」
- e. 依頼の終助詞「て」に接続：「大目にみてよ」
- f. 命令の終助詞「な」に接続：「大人になりなよ」

	よ→		
	a. よ→	b. だよ→	c. のかよ→
F 1	わ	だわ	のね
F 2	わよ・わね	よ	ものなの
F 3	わ	だわ	の
F 4	わ	よ	の
F 5	わ	よ	の
F 6	わ	よ	の
F 7	わよ	よ	の？
F 8	わ	よ	の
F 9	わ	だわ	のかしら
F 10	わ	なのよ	のかしら
F 11	わ・わよ	だわ	の
M 1	わよ	よ	のかしら
M 2	わ・わよ	よ	の

表 1 男性→女性（「よ」）

上記のうち、bは活用語の終止形「だ」に接続するものとしてaの中にも含め得るが、aとは書き替えの傾向が明らかに異なるので、ここでは別立てとする。また、d～fについては、命令・依頼表現の書き替えとして、2-3で触れることにする。

表1は、インフォーマントごとのa～cの書き替え結果をまとめたものである（女子学生をF1～F11、男子学生をM1～M2で示す）。aは「よ」の部分だけの書き替えであったが、bについては「だよ」、cについては「のかよ」と、上接語の部分も含む書き替えが見られた。

まず、aについては、「わ」へ書き替えたものが10名にのぼった。そのうち「わよ」を併用したものが2名いるが、残りの8名は機械的に「わ」への書き替えで統一している。「わよ」へ書き替えたものは4名で、「わ」と併用が2名、「わね」と併用が1名、「わよ」のみ用いたものが1名であった。

『日本文法大辞典』によると、活用語の終止形・形容動詞が上接する場合、男性は直接「よ」をつけるのに対し、女性の場合は「わ」を介するとある。ここでも、終止形に直接「よ」をつけた表現が男性のものと解され、女性のものとする「わ」に置き換えられるか、「わ」を介した「わよ」に置き換えられるか、の書き替えが施されている。単純に「わ」に置き換えた方が多い背景には、元の歌詞自体が「よ」と「わ」の使い分けで男女を書き分けていた点、「わよ」では音節数が増えてしまう点、などが考えられよう。

次にbについて見ると、「だ」を取って「よ」にした者が8名、「よ」を「わ」に替えて「だわ」にした者が4名、「だ」を「なの」に替えた者が1名であった。

『日本文法大辞典』には、名詞・副詞などに「よ」がつくとき、男性は「だ」を介するが、女性は直接つける、とある。また、「女性の『よ』は指定の助動詞と共存せず、かわりにその位置に立つ」という記述も見られる。

ここでも、「だよ」という指定の助動詞との共存は忌避され、「だ」を外すか「なの」に替える、もしくは「よ」の方を「わ」に替えることが行われている。

最後に、cについて見る。「のかよ」の「かよ」を取って「の」としたものが8名、「かよ」を「かしら」に替えたものが3名、その他、「かよ」を「ね」に替えたものが1名、全体を「ものなの」と替えたものが1名であった。

『日本文法大辞典』では、「よ」が疑問の「か」に下接するのは男性専用の言い方で、しかも「粗雑な、または方言的な言い方」とある。ここでも、女性にはふさわしくないとみてであろう、全員が書き替えを行っている。注目されるのは、疑問の終助詞「かしら」を用いたのが3名にとどまったことである。多数を占めた「の」は、たしかに疑問表現ともなるが、発話においては上昇イントネーション、文字表記においてはF7の回答のように「？」の助けなくしては、疑問かどうか曖昧な表現である。それでも、明示的な「かしら」より「の」が選択されているあたり、「かしら」の衰退を端的に示しているようにも思われる。

## ② 「ぜ」の書き替え

実際の書き替えをもとに、ここでは次の4つに分けて考察する。

- a. 活用語の終止形に直接接続：「考え直すぜ」「可愛くないぜ」
- b. 名詞に「だ」を介して接続：「俺だぜ」
- c. 準体助詞「ん」に「だ」を介して接続：「暮らして来たんだぜ」
- d. 形式名詞「もん」に「だ」を介して接続：「可愛いもんだぜ」

表2に、全員の書き替えを示す。

aについて見ると、全員が「わ」への書き替えを行っていて、そのうえで、「わよ」を併用しているものが4名、「のよ」を併用したものが2名であった。

ここでは、「ぜ」は男性専用という旧来の意識が発揮され、女性らしく思われる「わ」に置き換えられたと見られる。以下のb～dに関しても、「ぜ」を残す回答は見られないあたり、男性

専用の意識は根強いようである。

	ぜ→			
	a. ぜ→	b. だぜ→	c. んだぜ→	d. もんだぜ→
F 1	わ	よ・だわ	のよ	ものだわ
F 2	わ・わよ	よ	のよ	ものよ
F 3	わ	だわ	のよ	ものよ
F 4	わ	よ	のよ	もんよ
F 5	わ・わよ	よ	のよ	ものよ
F 6	わ	よ	のよ	もんよ
F 7	わ・のよ	なのよ	のよ	ものよ
F 8	わ・のよ	よ	のよ	ものよ
F 9	わ	だよ	んだよ	もんよ
F10	わ	だわ	のよ	ものだわ
F11	わ・わよ	なのよ	のよ	ものなのよ
M 1	わ	よ	のよ	ものよ
M 2	わ・わよ	よ	のよ	ものよ

表 2 男→女 (「ぜ」)

次に、「だ」を介したbを見ると、「よ」に替えたものが8名、「だわ」が3名、「なのよ」が2名、「だよ」が1名であった。表1における「だよ」の書き替えと似た傾向が見られる。ここで「だよ」に書き替えたF 9は、「だよ」自体は「だわ」

と書き替えていた。「だよ」「だぜ」の待遇差のようなものを表現しようとしたものかもしれない。

cの「んだぜ」は、F 9以外の全員が「のよ」と書き替えた。「だぜ」を「よ」に替えるのに加えて、「ん」を「の」に戻しているわけである。「んよ」という表現も考えられるが、共通語としてはあまり一般的ではないかもしれない。F 9の「んだよ」については、bの「だよ」と同じ理由も想定できるが、音節数を変えなくてすむ書き替えでもある。

dの「もんだぜ」については、「ものよ」が7名、「もんよ」が3名、「ものだわ」が2名、「ものなのよ」が1名であった。b・cの書き替えと同様に「よ」を使う傾向が見られるが、「もんよ」の3名以外はいずれも原型の「もの」に戻して使っている点が注目される。

## B 女性→男性

書き替えが行われたのは、「わ」「ね」「よ」で文が終わる部分であった。一括して表3に結果を示す。

### ① 「わ」の書き替え

今回の書き替えでは次の2種類が該当する。

- a. 活用語終止形に直接接続：「よくいうわ」「馬鹿いつてんじゃないわ」「心うたがうわ」  
「馬鹿やってんじゃないわ」
- b. 形容動詞語幹に「だ」を介して接続：「かわいそうだわ」

aについては、M 1以外の全員が「よ」を使用している。「ぜ」を併用しているものが7名い

るが、いずれも「心うたがうわ」の部分を「心うたがうぜ」に書き替えている。

bの「だわ」は、いずれも「だ」はそのままだ、「わ」を「ぜ」に改めたのが9名、「な」が3名、「よ」が1名であった。多くの学生は「だぜ」で、吐き捨てるような感じを現したものであろうか。

	わ→		ね→	よ→
	a. わ→	b. だわ→	のね→	のよ→
F 1	よ・ぜ	だよ	のか	んだ・んだぜ
F 2	よ・ぜ	だぜ	のかよ	ぜ・んだぜ
F 3	よ	だぜ	んだろ	んだよ・んだぜ
F 4	よ	だぜ	のか	ぜ
F 5	よ	だな	のか	んだ・んだぜ
F 6	よ・ぜ	だぜ	のか	ぜ
F 7	よ・ぜ	だぜ	んだろ	んだ・んだぜ
F 8	よ	だぜ	な	んだ・んだぜ
F 9	よ・ぜ	だぜ	んだな	んだぜ
F 10	よ・ぜ	だぜ	んだな	ぜ・んだぜ
F 11	よ・ぜ	だな	のかよ	んだよ・んだぜ
M 1	ぜ	だぜ	のかよ	んだよ・んだぜ
M 2	よ	だな	のか	んだよ・んだぜ

表 3 女→男（終助詞）

のように感じられる。

### ③ 「よ」の書き替え

「気に入らないのよ」「相手はいるのよ」と、いずれも終助詞「の」に下接するものであった。結果は、「のよ」を「んだぜ」と書き替えたものが11名に上り、「んだ」「んだよ」が4名、「ぜ」が3名であった。「ぜ」の使用と、「の」を「ん」に替えているのが目立つ。

意外に思われたのは「のさ」と替えた例が皆無だったことである。使用されなくなっているのか、はたまた『日本文法大辞典』「さ」の項にある「自分の発言は自明なことだと思いがら、聞き手にしいて押しつけもせず、それはそれだけのことといった態度で、あっさり言い放つとき使う」という点から、この歌のような切迫した局面では選択されなかったのであろうか。

## 2-3 命令・依頼表現

2-2で考察から外しておいた、d～fについて改めて見る。

結果を表4に一括して示す。

dの「みろよ」については、「みてよ」に書き替えたのが9名、「みてね」が2名、「みなよ」「みなさいよ」が各1名であった。

『日本文法大辞典』によれば、女性でも活用語の命令形に直接「よ」をつけられるが、「ただし敬語動詞命令形が主」と書いてある。「みなさいよ」という書き替えはまさにそれに該当する。

### ② 「ね」の書き替え

元の歌詞では、「思っているのね」と、終助詞「の」に下接したものだけが見られる。

結果としては、「のね」を「のか」に書き替えたものが5名、「のかよ」が3名、「んだろ」「んだな」が各2名、「な」が1名であった。「のね」には、呆れたような響きを感じられるのに対し、「のか」「のかよ」は詰問の表現

同書では、「みてよ」のような「て」「で」につくような形は女性専用とされている。言葉の上では、女性の命令表現を許容しないような面があったわけで、今回の書き替えでもその名残が見られる。

その「みてよ」を男性が用いているのが e の部分である。追いつめられた男性が居丈高な命令から哀願調に変わる。

以前の歌番組の替え歌では「みてね」に替えていたことは前述した。

ところが、今回の書き替えでは、「みてよ」のままが 11 名と、ほぼ全員であった。「みてね」への書き替えもあるが、F11 は「みてろ」の場合も「みてね」であり、変化を表わす工夫は施されていない。一方、F2 が「みてよ」から「みてよね」、F4 が「みなよ」から「みてよ」、F10 が「みてね」から「みてよ」、M2 が「み

	d. みろよ→	e. みてよ→	f. なりなよ→
F 1	みてよ	みてよ	なりなよ
F 2	みてよ	みてよね	なりなよ
F 3	みてよ	みてよ	なりなよ
F 4	みなよ	みてよ	なりなよ
F 5	みてよ	みてよ	なりなさいよ
F 6	みてよ	みてよ	なりなさいよ
F 7	みてよ	みてよ	なりなさいよ
F 8	みてよ	みてよ	なりなよ
F 9	みてよ	みてよ	なりなよ
F10	みてね	みてよ	なりなよ
F11	みてね	みてね	なったら
M 1	みてよ	みてよ	なりなよ
M 2	みなさいよ	みてよ	なりなよ

表 4 男→女 (命令・依頼表現)

なさいよ」から「みてよ」としたのは、それぞれ元歌のような変化を表わそうとしたものと考えられる。F4 と M2 は、命令から依頼への変化をそれなりに反映している。また、F2 は依頼からさらに親近感に訴える表現に移行する点、番組での替え歌の「みてよ」から「みてね」に相通じるところがある。F10 が番組と逆になったのは、時代の変化を反映するものなら興味深い、何とも言い難い点がある。

f の「なりなよ」に関しては、9 名がそのまま「なりなよ」を用い、「なりなさいよ」と書き替えたのが 3 名、命令形を用いずに「なったら」としたのが 1 名であった。

「なりなさいよ」は a での「みなさいよ」と同様の例と考えられる。「なりなよ」の終助詞「な」について、『日本文法大辞典』では「動詞の命令形そのままよりは、聞き手に命令する力が弱い、品の悪い感じを伴うため、現在ではあまり使われない」としている。俗語としては現在も使われているようであり、現代の学生たちにとっては女性が使ってもさほど違和感のない表現なのかもしれない。

## 2-4 その他

その他に分類されるものとして、まず授益表現があげられる。

元歌では「許してあげない」の箇所である。表 5 に書き替えの結果を示す。

「許してやらない」と書き替えたのが 8 名、「許してやらねえ (ぞ)」も加えると 9 名になる(「やらねえ (ぞ)」と書き替えた F11 は、助動詞「ない」を全て「ねえ」と書き替えている)。

一方、そのまま「許してあげない」としたのは2名、「ぜ」を加えて男性語風にしたのが1名であった。本来謙譲語であった「あげる」は「やる」のイメージの低下とともに、特に女性に好んで用いられるようになり、今や子どもやペット、植物や食材・衣服などにまで用いられるに至ったと言われる。ここでの回答にも、「あげる」が女性語、「やる」が男性語という意識が現れているように思われる。

ただ、「あげない」は親愛の情を含む表現とも考えられ、許す余地をかなり残しているようなニュアンスもある。「やらない」は、それよりきつい感じがある。「許さないからな」になると、取りつく島もない感じすらある。

その他、個人個人で単語の置き換えが散見した。以下、列挙してみよう。

- a. 「など」→「なんて」 (F 2 : 男→女)
- b. 「甘えてばかり」→「威張ってばかり」  
(F 6 : 女→男)
- c. 「可愛くないわ」→「格好よくないわ」  
(同上)
- d. 「涙も見せずに」→「怒りもせずに」  
(F 9 : 男→女)
- e. 「惚れた」→「好きになった」  
(F 11 : 男→女)

aは、女性語の方がより口語的である点に着目したものであろうか。b～dは行動様式や価値観における男女の差にまで思いを及ぼしたものである。eは、女性はあまり「惚れる」は使わないだろうという指摘である。このような教員の想定を超えた学生の思考活動が行われた点、興味深いものがある。

## むすび

以上、学生の提出した課題をもとに、現代の大学生が言語の男女差に関して持っている意識について見てきた。

人称代名詞こそ全員の書き替えが一致したものの、他では個人による違いがかなり見られた。その中で、同じ書き替え（あるいは書き替えない回答）が多かったものを人数順に列挙する。

- 13名全員 「ぜ」→「わ」(男→女)
- 12名 「んだぜ」→「のよ」(男→女) 「わ」→「よ」(女→男)
- 11名 「のよ」→「んだぜ」(女→男) 「みてよ」→「みてよ」(男→女)
- 10名 「よ」→「わ」(男→女)
- 9名 「みろよ」→「みてよ」(男→女) 「なりなよ」→「なりなよ」(男→女)
- 8名 「だよ」→「よ」(男→女) 「のかよ」→「の」(男→女)
- 「だぜ」→「だよ」(男→女)
- 「許してあげない」→「許してやらない」(女→男)

	許してあげない→
F 1	許してやらない
F 2	許してやらない
F 3	許してやらない
F 4	許してあげない
F 5	許してやらない
F 6	許さないからな
F 7	許してやらない (やらねえ)
F 8	許してやらない
F 9	許してあげない
F 10	許してやらない
F 11	許してやらねえ (ぞ)
M 1	許してあげないぜ
M 2	許してやらない

表 5 女→男 (授益表現)



やはり、従来男性専用、女性専用とされてきた語に関しては一致度が高いようである。しかし、このうち、双方向的な書き替えの傾向が見られるのは、男性の「んだぜ」と女性の「のよ」、男性の「よ」と女性の「わ」の二組だけであった。必ずしも機械的に交換しているわけではないのである。「みてよ」「なりなよ」のように書き替えない方が主流の語は、男女差の衰退が進んでいるものかもしれない。

ところで、学生の中に社会人入学のものがまじっていると前述したが、F11の学生がそれに当たる。改めて表を見返せば、たしかに他の学生と違った書き替えも見られる一方、他と同様な点も見られる。実際に女性語を使ってきた経験がある学生と、知識として知っているだけで日常では聞いたり話したりすることのない学生とでは、おのずと違いが出て当然であろう。しかし、共通する部分も多いということは、若い学生であっても規範としての女性語の認識はある程度保持しているということであろう。考察の対象から外した留学生の書き替えにしても、日本人学生と共通する点が多かった。これはもちろん、教室での日本語学習やドラマ・映画などの視聴によって身に付けたものであろうが、彼女たちもふだん使用するには至っていないであろう。

今回は、元々男女差が明確に現れている元歌を素材としたため、ある程度機械的な置き換えを可能とするヒントも含まれていたかと思われる。仮に男女の発話の空欄を補充させるような課題であったら、より性差の衰退ぶりが顕著に見られたかもしれない。

また、今回のインフォーマントは受講者が女子に偏っていたため、男女の意識差を考察するには至らなかった。男子をあと10名ほど加えられれば、男女両面の見方を知ることができたかもしれない。

言語の男女差は、モデルとしてのみ残り実際には消滅していくものなのであろうか。あるいは、別の形に変容して生き続けるものなのだろうか。ジェンダー論との関連、ポライトネスの観点からの考察など、機会があれば考えてみたい。

## 文献

- 現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』（1999、ひつじ書房）  
飛田良文ほか5名編『日本語学研究事典』（2007、明治書院）  
松村明編『日本文法大辞典』（1971、明治書院）